スイーツ

水守中也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スイーツ

【Ｎコード】
Ｎ６７９８Ｎ

【作者名】
水守中也

【あらすじ】
店内に入った途端、ぼくたちに集まった視線。なにこれ？

天文通りにあるスイーツ専門店『天真爛漫』。そこは……死地だった。

店員さんやお客さんの視線が痛い。予想はしていたが想像以上だった。

――落ち着け。目をつぶって現実逃避してみよう。

駄目だった。全然痛みが治まらない。瞳を閉じても感じられる視線。いつからぼくは超能力者になったのか？

恐る恐る瞳を開いて店内を見渡す。

店内の客層は、女性二人もしくは複数組がほとんどである。彼女たちがこの場の雰囲気を支配していると言っても過言ではない。

女性一人客もいる。少数だけど、浮いているとか、そんなことはない。

男性客も、ぼくたちの他に数名見受けられた。しかし例外なく彼らの向かいには女性がいる。その盾があるからこそ、彼らはこの世界で、生きていけるのだ。

しかし。

男二人組で店内に足を踏み入れた瞬間に浴びた視線は、異分子を排除するか如くの敵対的ものと……不気味なほどの生温かいものだった。

「どうした、アオ？　落ち着かない様子だな。そんなにスイーツが待ち遠しいか？」

ぼくの向かいに座って、季節限定の「羽生の穴熊しゅぺしゃる」を待ちわびている先輩（男）が言った。

背が高くてごつい、いわゆるマッチョ体型でありながら、その風

貌に似合わず、甘いものが好物という変わり者である。いっそ鉱物なら分かるけど。
「いや、なんか店内の視線が気になって……」
「安心しろ。俺はスイーツしか見ていない」
「ぼくが気にするんです」
不公平だと思う。
男女差別だ。
ぼくだって、男だって、甘いものを食べたいときはあるのだ。
思わず口に出る。
「……いっそ、ぼくが女だったら良かったのに」
「それは向かいに座る俺に対しての遠回しな告白か？」
「違いますっ！」

店内を見回せば、確実に興味深々な女性客と目が合ってしまうため、仕方なく視線を向かい座る大きな的に固定する。
道尾藤矢先輩。大学五年生。オカルト研究会所属。がっしりした体型に豪胆な性格といういかにも体育会系。彼女はいないようだけど、それなりに顔は整っているからマッチョ好きの女性からは人気があると思う。
「なんでぼくを誘ったんですか？」
「ん？　一人じゃ入りずらいだろ」
それなりに自覚はあるのか。
「こういう店に入るなら、ぼくじゃなくて、女の人を誘えばよかったのに」
「彼女などいないぞ」
「知ってます。けど、ツイッターや出会い系のサイトで正直に書きこんで費用当方負担とでもしておけば、いくらでも集まるんじゃないですか」
「いや、知らん女と食べるより、お前との方が楽しいし……ってなんだその目は」

「……変な意味じゃないですよね？」
「そのまんまの意味だが……」
顔に似合わぬきょとんとした表情を見せる先輩。
もし先の発言に意味深な内容が含まれているのなら、全力で逃げだしているところだった。今だって、出来ることなら店から立ち去りたい。けれど、ここまで晒されハリネズミ状態になったのに、「季節限定、羽生の穴熊しゅぺしゃる」を食べずに出ては、晒され損だ。なにか良い方法はなかったのだろうか。
「そうだ。二人してスーツを着て入店すれば。そしたら会社員同士の、仕事の打ち合わせに見えたかも」
先輩が、豪快に笑った。
「アオと俺だったら、七五三とその親だろ」
「――って、ぼくだって、大学生です。せめてリクルートって……」
「お待たせいたしました」
店員さんの声が割り込んだ。
ようやく、ぼくたちのテーブルに「季節限定、羽生の穴熊しゅぺしゃる」が届けられた。
これのためにアウエーに乗り込んだのだ。もう他人も視線など関係なかった。
ぼくは一心不乱それでいて丁寧にスプーンで氷の山を崩して、口に運んだ。練乳の甘さとフルーツのほのかな酸味。舌の上ですっと溶けてゆく、白雪のような氷。
うーん、美味しいっ。
一息つくと、視線に気づいた。女性陣からではない。目の前の先輩が、にやにやとこちらを見ていた。
「……なんですか？」
「うむ。なんか子犬に餌をやっている気分だ」
……失礼な。
「ま、来て良かっただろ」
「ええ、まぁ……」

不承不承うなずくと、先輩は大きな口をあけて笑った。
「それでこそ、無理やりお前を連れだした甲斐があったってことだ」
「先輩がここの入るために、ですね」
「ん？　一人じゃ入りずらいってのは、俺じゃなくて、アオがそう思っているんじゃないかってことだぞ」
「えっ……」
先輩は豪快にフルーツの山を崩しながら、続けた。
「そもそも俺は店内の視線など気にならないと言っただろう」
――意外だった。先輩は、同じ趣味を持つ僕のために、この店に連れてきてくれたのだ。唯我独尊。自分良ければすべて良し、と言いそうな人が、ぼくのことを考えてくれていたなんて。

だけど言わせてください。

「いや、男二人組の方が難易度高いですって」

（後書き）

男一人と男二人、どっちが難易度高いのでしょう？
体験したことないので分かりません（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6798n/

スイーツ

2010年10月9日17時37分発行